

借金お嬢クリスマス

42兆円耳を揃えて返してやりますわ

筑摩十幸
挿絵／了藤誠仁



龍皇寺クリス

りゅうおうおうじ



龍皇寺グループの令嬢。諸星学園三年生で生徒会長も務める。しかし父親の失踪で全財産を失ってしまい…。

ガーランド



クリスの借金を回収するために彼女の前に現れた、銀髪の不良少年。

美月レイ

みつき



クリスに仕える少女メイド。傲慢かつ奔放な主のサポート役。

巖島サキ

いづくしま



諸星学園に転校してきた巖島重工の一人娘。銀髪ツインテールの小柄な少女。

とくらひなこ 都倉雛子



名門諸星学園に編入した庶民の娘。獣医の父を持つおっとりとした性格の眼鏡ッ娘。

ヴァネッサ



世界中の富の半分を統轄するといわれるオージェ財団の総帥。大人っぽい魅力に溢れた美女。

ジグレット



クリスの父を陥れ、龍皇寺家の財産を奪った張本人。常に薄笑いを浮かべている不気味な男。

ヴァルチャア



寡黙で何を考えているのかわからない、ヴァネッサの従者。ロープを纏っている。

(ちよつと、ガーランド！ なにやってるのよ、助けなさいっ！)

心の中で叫んでも相棒からの返事はない。

令嬢の混乱もどこ吹く風と、蛇は柔らかな舌の上で気持ちよさげに身をくねらせている。緩やかに抜き差ししたかと思えば、捻るような回転を加えつつ奥深くまで侵入する。たっぷり令嬢の熱く柔らかい粘膜の感触を味わった後、蛇はパツクリと口を開き、何かドロリとしたものを吐き出した。

「んぐぐぐっ!! むふううううううっ!!」

一瞬毒かと思つて身を硬くしたが、得体の知れない粘液はしかし、甘いトロミのある不思議な粘液体だった。

(なに……これ……あまい……?)

「それは栄養たっぷりミルクですよ。フッフ、今のあなたの身体は欲しているはず。遠慮なくお飲みなさい」

そうは言われても蛇の口から出てきたモノを飲み込むなどあり得ない。クリスは赤いウエーブを波打たせてブンブンと首を振る。でも飢えた胃も渴ききつた喉も、確かにその液体を欲している。

(ダメよ、クリス！ 飲んではダメ！ 敵の罠に決まっていますわ！)

甘美な誘惑に必死に耐えるクリス。しかし後から後から吐き出される『ミルク』は口の

中にどんどん溜まってくる。甘い味と本物のミルクのような芳香が鼻腔をくすぐった。味蕾を甘く犯された舌は縮こまり、今にも嘔下^{えんげ}してしまいそうだ。

「我慢する必要はありません。そんな姿はあなたに似合わない」

鳩尾に刺さった鍼がクルクルと回され、お腹に真空が生まれたような空腹感に襲われる。胃を中心にして身体全体が吸い込まれそうな感覚に目眩^{めまい}がした。

「そうそう、呼吸も大事な欲求でしたね」

鼻を摘まれて呼吸まで止められてしまつては万事休す。口いっぱい押し込まれたモノをどうにかしないと窒息してしまふ。

「んぐ……むう……んぶつ……むふううつ」

眉根を寄せ、上気した美貌がセクシーに振りたくられる。

(そんな………されたらあ………つ)

堪えきれず喉がゴクリと鳴った。極限の飢餓感のせい、重く粘る液体が食道をゆつくりと流れ落ちていくのがハッキリわかった。そしてその塊が胃に落ちた瞬間、言いようのない幸福感がお腹の中でドツと爆発する。

(あ………ああ………すご………い………)

内臓だけでなく、全身の細胞一つ一つが一斉に歓喜の叫びを上げているのだ。血湧き肉躍るとはまさにこのことだった。しかし飲み込んだ量はほんの少し。その快悦の炎は鮮烈

な光を残してあつと言う間に消えてしまった。爆発的な快美を味わっただけに、その空虚感はいくらにももどかしかった。

(な、なんなの今の……)

わけがわからないうちに蛇に舌を突かれ、反射的に縮こまる。さらなる一口が喉へ送り込まれた。

(ああ……)

喉を下っていく最中から早くもあの幸福感が押し寄せてくる。食道の長さすら焦れつく感じるほどに。

そして、再び胃に落ちる。まるで自分の身体の中心に深い井戸が掘られていて、その奥底、魂の水面に波紋が広がるように……。

「んはああ~~~~つ！ あああ……んッ」

椅子の上でギクンと背筋が反り返る。胸当てからはみ出した双乳がプルプルと揺れ弾み、タイトスカートが捲かれて純白のショーツがチラチラと見えてしまう。

たまらなかつた。蛇が吐き出す白濁蜜はこれまで口にしたどんなご馳走よりも美味しく感じられ、二度と口から放したくないと思いきや、そうになるほど。

「美味しいでしょう。遠慮せずにどんどん飲みなさい」

(こんなものが……美味しい……ですって……?)

そんなはずはないと、クリスは舌で蛇を追いつき出そうとする。だがそれが刺激になったのか、蛇はピクピクと身を震わせてドブツとミルクを吐き出した。

「ソ……ぐつ……また出されて……む……くちゅ……じゅぶつ……んふう」

一口飲むほどに、強いアルコールでも飲んだような酩酊感が深まる。もう飲んではいけない、これ以上はダメだと思っても、反射的に舌が動くのを止められなかった。

「そうです、欲望のままに……自分の内なる声に従えばいいのですよ、クリス」

ジグレットに髪をつかまれ、頭を前後に揺さぶられた。

「あ、ああ……こんな……んちゅ……したく……くちゅば……ない……」

唇が窄すぼまって蛇の首を締めつけ、そのまましごくように上下する。唇が捲り返り、鼻下が伸びて無様な顔を晒しているのはわかっていたが、甘露かんろうをドクドクと流し込まれるとそんな羞恥も吹っ飛んでしまう。強制された動きに馴染んでしまったのか、ジグレットが手を緩めてもクリスの唇は従順に蛇の頭をしゃぶっている。

「そうそう上手ですよ、クリス。もつと舌を絡めて……もつと深く……もつと貪欲に……喉の奥までくわえ込みなさい」

（もつと飲みたく……ああ、もつと……欲しくなっちゃう……）

「んんっ……ちゅばあっ……こんなのいや……むふう……いやなはずなのに……んくう」
ざらつく鱗の感触もだんだんイヤじゃなくなり、クリスは狂おしい衝動に駆られて蛇頭

を思いきり深く飲み込んでいく。太く硬い棒に喉奥を突かれる息苦しさすら心地よく感じてしまう。

とつくに解放されていた小鼻をいやらしく膨らませ、ムフンムフンと甘い鼻息を漏らしながら、蛇への奉仕に没頭していく赤毛の令嬢。トロンと目尻を下げたまま、次々に吐き出される白濁を乳飲み子のように飲み続ける。

食欲を満たされる悦びにスレンダーな身体は椅子の上で妖しくうねくり、ドレスの乱れを気にする余裕もない。乳房の弾力が重力と拮抗しながら上下に揺れ、白い太腿も切なさを凝縮してキリキリと突つ張る。乱れ髪が貼りつくうなじも汗ばんで、早熟な色気を醸し出していた。

「ククク。もうそろそろですね」

小生意気な財閥令嬢が蛇に責められ倒錯の快楽に追いつめられている。その姿は冷徹な異世界の男をも魅了し、ジグレットは昂奮で乾いた唇をペロリと舌なめずりした。

(ああ……お、お腹が……)

ミルクを飲むほどに下腹が熱く張りつめてくる。その違和感にクリスはハッと我に返った。急激な尿意が襲いかかってきたのだ。

(どうして急に……そんな……も、漏れちゃうつ……お腹が裂けちゃうつ)

蛇触手をくわえたまま、クリスの美貌は赤くなったり青くなったりする。空腹を満たさ



心と裏腹に肉体は異様な昂奮状態に高ぶっていく。あの甘い痺れもますます口中に広がって、被虐の官能に頭がボウツとしてくる。痴漢に責められる乳房やクリトリスへの刺激が物足りなく感じるほどだ。

「くやしいだけじゃつまらねえ。もっとお前も楽しむんだ」

クリスの気持ちを読んだかのように、背後から伸びた手が両腕を二人羽織のように操って、胸と股間に誘導していく。

「んぐ……な、なにを……んむ……くちゅ……ンンン」

「ククク。オナニーくらいしたことがあるだろ。見せてくれよ」

（そんな……オナニーなんて……こんなところで……）

あまりにも過酷な要求にクリスは勃起をくわえたまま硬直してしまった。まして白昼衆人環視の中でそんな恥ずかしいことできるはずがない。

「お嬢さまのオナニーショウか。これは見物だな」

「断ればどうなるか、わかつているよな」

雛子の頬にナイフをぺたぺたと当てながら男が迫った。

「あう……クリスさん……ダメです……言いなりになっては……ハアハア……私には構わないで……逃げてくださ……うぐぐ……っ」

男の腕を振りほどいて健気にも声をかけてくれたが、すぐにまた口を塞がれてしまう。

(雛子……わたくしが必ず助けてあげますわ)

殉教者めいた自己犠牲の精神に押され、令嬢の手がゆっくりと自慰行為を開始する。

「やりますわ……ん……ああ……だから……あふう……んっ」

柔らかな乳房をパン生地を捏ねるようにマッサージュすれば、甘美な火の粉が乳房の中にばらまかれる。痺れるようなくすぐったさが心臓を貫いて脊椎を揺さぶり、子宮にまで伝わってくるのがたまらない。

(ああ……お乳が……すぐく感じやすく……なってる……)

麓^{かかと}から頂に向かつて圧迫を加えていくと、乳輪がぷっくりと膨らんで乳首が痛いほど疼き出す。恐る恐るそこに触れると――

「あああああんっ！」

高圧電流に感電したような激感に、クリスはギクンと背筋を反らせた。乳腺すべてが性感神経に変えられてしまったように、熱泉のような女悦が後から後から湧き起る。自虐の指にも力がこもり、指の股から白い乳脂がムニュツとはみ出す。その熱波は確実に胎内^{たない}にも伝わり、破廉恥な願望が下腹の奥で蠢動^{しゅんどう}を始めた。

「そろそろ下も触るんだ」

「ん……ああ……はい……んっふう……あんん」

痴漢の手で下ごしらえされた身体は自分でも驚くほど敏感だった。今の状態で感じやす

い淫核に触れたらどうなってしまうのか。悩ましいスリルに背筋を強張らせながら、震える手指がスキヤンティの中に潜り込んでいく。平均以上に盛り上がった恥丘を越え、蒸れた密林を掻き分け、細い指先がクレヴァスの上端に届いた。

「んん……つく……あ、はうっ！」

乳首を遥かに上回る劇的な快楽の矢が、真下から垂直に令嬢の身体を刺し貫く。快感の大きさもすごいが、なにより深さが段違いだ。神経よりも筋肉よりも深く、骨に響く感じ。恥骨から腰椎、脊椎から頸椎、頭蓋骨までが、快楽の音叉となって愉悦の旋律を全身に響かせるのだ。その感音が最も響くのが唇だった。クリスの官能と同調して、唇の感度も上がっていくのだ。

「もつといじれ。もつと感じろ」

『もつと素直に、自分の欲求に従うのです』

痴漢の声とジグレットの声が重なり、脳内でこだまする。

「あ、あう……ふあい……んっ、むふっ……くちゅちゅぶっ……むふうん」

催眠術にかかってしまったかのように、生まれて初めてのオナニーにのめり込んでいくクリス。乳房を捏ね回し乳首を摘み、花唇をなぞりわけて、クリトリスを指先に転がす。秘園はすでにグツショリと濡れており、指を激しく動かすにつれてクチュクチュと淫靡な水音が漏れ始めた。

「おらおら、チ○ポもうまいだろう」

『ありのままの姿をさらけ出しなさい』

「んあ……くちゅっ……は……は……い……んっ、んっ、んっ……じゆる、むふうん」

もはやペニスをくわえることへの抵抗は理性の薄紙を剥がすように消え去り、フェラチオ奉仕も積極的になっていく。たっぷり唾液を乗せた舌の腹で亀頭を包み込むようにねぶり上げる。強くリング状に窄めた唇を前後にスライドさせ、醜悪な太幹を研磨していく。

(ああ……お口がスゴイ……感じちゃう)

カカリに擦られる舌粘膜に、亀頭に抉られる喉奥に、肉棒に研磨される唇に、これまで感じたこともない快楽の火花が弾け散る。淫らな衝動に駆られて、令嬢は赤毛ロングを振り乱して、男根奉仕にのめり込んでいく。

これまで男の生殖器を口で愛するなど考えたこともなかったし、あつたとしてもそれはいやらしい風俗の世界の出来事、自分とはまったく無縁の変態行為だと思っていた。

だが今、こうして勃起を口に迎え入れてみると、これまで感じたこともない昂奮がこみ上げてくる。圧倒的な牡のパワーとでもいうべきものを感じさせられると、甘い屈服感が肉を爛れさせ心を腐敗させる。常に人の上に立つことを当然のこととして生きてきた自分が、下品な痴漢男に奉仕しているという落差が、なぜか倒錯した悦びを呼び起こす。

そして奉仕するほどに肉棒がいきり立ち、雄々しさを増していくのが、令嬢の奥底に秘

められた女の悦びをくすぐってくるのだった。

いつしか唇の端から涎がこぼれ、ジュルルツと啜り音が鳴り響く。小鼻はいやらしく開ききつて、ムフンアフンと甘えるような鼻声が漏れてしまう。

「みんなが見ているのに、そんなエロい顔していいのかよ、お嬢さま」

ハツと顔を上げると、取り囲んでいた痴漢たちの群れが割れて、そこから大勢の一般乗客がこちらを見ているではないか。

（—— ツツツツ!!）

ショックのあまりクリスは大パニックになった。痴漢たちだけならまだしも、普通の乗客にまで見られてしまい、全身の毛穴から血が噴き出すのではないかと思うほどの羞恥に身悶える。

（いやあつ！ 見ないでっ！ 見ないでえっ！）

日頃厳格げんかくに躰しんけられ、家の恥になるようなことをしないように教育されてきた令嬢にとつて、死にも勝る衝撃だった。地球が爆発して全人類が死滅しても構わないとすら思った。

「お、おい。あの娘なにやってるんだ！」

「電車の中でフェラチオしているぞ。あんなに可愛い顔して信じられねえ」

「見てよ、おしゃぶりしながらオナニーまでしているじゃないの！」

「格好だけじゃなくて中身も変態の痴女なのね」

乗客たちにはクリスが自ら進んで変態行為をしている痴女に見えているのだろう。容赦ようしやのない罵声ばせいや嘲りあざわらひが土砂降りの雨のようにクリスを打ち据えた。

(ああ……こんな……こないやらしい姿を……大勢に見られてる……)

激烈な羞恥に全身の血が沸騰する。普段の令嬢なら舌を噛み切つて自害を試みただろう。だがなぜか、今のクリスにはそんな恥辱も異様な情感を掻き立てる導火線だった。

「ほう……んんむ……あ、ああうん……み、みないれえ……んぶくちゅぱつ」

恥ずかしく惨めな自分の姿を見られていると思うとゾクゾクと妖しい昂奮がこみ上げてきて、かつてジグレットの蛇に教えられたテクニクまで披露ひろうしてしまう。

喉奥深く食道近くまで迎え入れ、ディープスロートで陰茎をしごき抜く。頬をくぼませて唇を突き出す無様なフェラ顔を晒しながら、ウェーブした赤髪をリズムカルに揺する。

「んはああ……じゅぱつ……んふう……くちゅくちゅ……じゅるるっ」

唾液を湧かせて勃起にまぶし、匂いと味を十分染み込ませてから、はしたない吸着音を派手に立てて一気に啜り飲む。そうかと思えばわざと唇の端から溢れさせ、喉に滴したたらせてみせる。いつしかペニスの熱さ硬さ逞しさを、舌の上で楽しんでる自分に気づく。

(どうして……こんなはしたないことさせられて……死にたいほど恥ずかしいのにお口を止められない……どうして……ああ……夢……きつとこれも夢なのですわ……)

朦朧としたまま令嬢の精神は自ら作り出した白昼夢の世界に沈んでいく。

そして肉体もまた淫らな迷宮に迷い込んでいた。乳首にもクリトリスにも、強力クリップと化した指が噛みつき、普段なら堪えられないほどの鋭い痛みが走るが、その疼痛が気持ちいいのである。

「あんなにうっとりした顔して……よほどチ○ポが好きなんだな」

「パンティもグチヨグチヨだ。本気で感じているんだぜ、あの変態女」

「露出症の痴女つて本当にいるんだな」

「あうう……わたくしは……んちゅ……へ、変態なんかじゃ……ああ……痴女なんかじゃありませんわ……ねろれろお、ンふうう、うん」

発情しきつた自分の姿に夥しい観衆の視線が集中しているのがハッキリわかる。これまで誰からも敬われ尊ばれてきた自分が、侮蔑と嘲笑の対象になっている。視線は無数の針となって乳房や股間を針山に変える。その一本一本から微かな痛みとともに甘い毒が染み込んできて、令嬢の唇へ流れ込んでいく。

「変態じゃないだつて？ ふふふん、今自分がどこで何しているか言ってみろよ」

男は嘲笑いながら一旦ペニスを抜き放った。奉仕に没頭していたクリスは一瞬物欲しそうな表情を浮かべてしまう。

「ほれほれ、言ってみろ」

「あ、あ……ああん」

勃起で令嬢の整った鼻を、柔らかそうな頬をグリグリと擦り上げる。美貌を豚のように損壊されて、プライドが音を立てて崩れていく。

「うう……わ、わたくしは……ああ……電車の中で……お、男の人のアレを……」

「アレじゃわからないぜ」

さらに青臭い牡汁を顔面に塗りたくられる屈辱。いやらしい匂いが染み込んで離れなくなってしまうようだ。

（ああ……汚されていく……わたくしの顔が……）

イヤだと思ってもなぜか身体は動いてくれない。クナクナと左右に首を振る様は自分から勃起に顔を押し当てているかのようだ。口の中が物寂しく、思わず舌が伸びてしまいうになる。

「男の人のオ……オチンチンを……はああ……お、おしゃぶり……していますわ……」

「それだけじゃないだろう。お前の手は遊んでいるワケじゃないだろ？」

「お乳を……お乳を揉んでますわ……はああン！ それから……ア、アソコも……」

「アソコじゃないだろう。ちゃんと見え」

令嬢を恥辱のどん底に突き落とそうと、痴漢青年はさらなる淫語を囁く。

あの言葉を、卑猥すぎる四文字を言わせようとしているのだ。

（それだけは……言えませんわ）

ゴージャスな赤髪を振り回してイヤイヤする令嬢の頬に、勃起ペニスの往復ピンタが何発も見舞われた。

パシッ！ ピタッ！ パシッ！ ビタンッ！

「ああ……いや……やめて」

いやらしい打擲音ちようちやくが響くたび、矜持がごつそりと剥がれ落ちる。痛みはほとんどないが、ペニスピンタの精神的ダメージは強烈だった。ピンタを喰らうほどに噎せ返るような淫臭がきつくなってくるのもたまらない。

その屈辱に耐えきれず、クリスは男の求める言葉を口にしてしまう。

「お……お乳をモミモミして……ああ……それからあ……」

「それから？ どこをいじっているんだ？」

「ハアハア……オ……オ、オ、オマ○コ……ああン……オマ○コですわ」

言ってしまった瞬間、まっ赤な稲妻が脳天から爪先まで駆け下りる。囁かれるだけでまっ赤になるほどの卑猥な言葉を、普通の令嬢の生活を送っていれば一生口にすることもなかったであろう淫らな四文字をついに自ら口にしてしまった。

「あ、ああ……クリスは……お乳と……オ、オマ○コをいじって……ああ……オ……オナニ……していますのお……ああああん」

言い終わると同時にガクリと頭を垂れる。言葉が及ぼすダメージは予想以上に大きく、

令嬢は心を打ち砕かれてしまった。

(わたくし……なんてはしたくないことを……)

大勢の老若男女の前でのオナニー、男根を口で舐めしゃぶるフェラチオ、そしてなにより猥褻な四文字。どれも名家の令嬢としては絶対にやってはならないはしたない行為だ。

(見ないで……聞かないでえ……)

心の中では懊惱おうのうしつつも、自慰の指もおしゃぶりの舌も休みなく動き続ける。猥褻いんわいな台詞の合間にチュパ音も交えて、下品な色気をアピールしてしまう。

「まあ、なんて言葉を……いやらしい娘ね。聞いているほうが恥ずかしくなるわ」

「やっぱり変態の痴女じゃねえかよ」

罵声が次々に浴びせられて、死にたいほどの恥辱に心臓がキリキリと痛む。だがその恥ずかしさ、惨めさが、この上ない媚薬となつてクリスの精神を汚染する。ジグレットによつて植えつけられたマゾヒズムの種は、令嬢の中で確実に育つていたのだ。

「ああ……もう……見ないで……ぴちやくちやつ……そんなに見つめないでえ……はあはあ……これ以上見られたらあ……ああうん……おかしくなつちゃうっ！」

恥辱露出責めで錯乱した令嬢は、求められるまでもなく自ら男根をくわえ込んでしまう。口腔を再びあの甘電流が駆け抜け、フェラチオ奉仕とくの虜とらに成り下がる。

(ああ……オチンチン……お口がたままない……)

唇と連動して処女の秘奥がカアツと熱くなり、はしたない牝蜜めすつろがとめどなく溢れ出す。スキャンティから染み出して太腿を濡らし、電車の床にポタポタと滴を落としてしまう。官能曲線が急カーブで上昇し、桃色の天頂を直指して暴走していく。

「フフフ、いつも気取つてるお嬢さまが、くう……こんなチ○ポ好きの変態だったとは思わなかつたぜつ。ハアハアツ」

限界が近づきつつあるのだろう、若い男は荒い呼吸を繰り返しながらクリスの頭髮に指を潜り込ませてガツチリ固定した。

「今から……はあはあ……お前の口にぶちまけてやるからなあつ」

おぞましい未来を宣言し、ファックするように腰を振り始める。過激な突き上げは喉奥を抉り頭をグラグラと揺さぶつた。唇の快感電流は稲妻となつて、喉を下つて心臓を直撃する。

「んぐう！ ひやめ……あむう！ そ、それだけは……んぐぐ！ いひやあつ！」

男の狙いを悟つたクリスは首を小刻みに横に振る。牡の精液を口に注がれるなど、あり得ないほどおぞましい異常行為だ。そんなことをされたらプライドを打ち碎かれ、人格まで崩壊しかねない。しかも今クリスの唇は性感帯と変わらないほど感じやすくなっている。そこに精を浴びたらどうなってしまうのか、自分で自分が恐ろしい。

令嬢の儂い抵抗もかえつて男を悦ばせてしまったようで、その間にも口腔でペニスがかさ



らに硬度を増して勃起してくる。鈴口から湧き出る先走りの露も粘り気を増して絡みついてくる。

「おお、どんどん気持ちよくなるぜ。おら、さっきの台詞を言うんだ。もつと詳しく、いやらしく、こういう風にな」

ドスドスと剛直を撃ち込みながら痴漢青年が迫った。その力強いピストンが、気丈な令嬢に屈服の快感を、墮落の悦びを刻み込んでいく。

「あうっ……んん……クリスは……んちゅ……レん車の中で……ち、痴漢様のオチ○ポを……はあああん！ おしやぶりしながらあ……れろれろおっ」

たとえ無理矢理でも、言わされるうちに本当に自分がいやらしい女になったような気持ちになってくる。そしてそんな姿をもつと見られたという狂った願望が頭をもたげてくる。

「はあああ……クリスはあ……処女なのにいやらしいオッパイと濡れ濡れのオマ○コをいじって……オナニーしている……んふうん……変態痴女ですわあ……あああん」

異様な昂奮に呑み込まれ、普段なら死んでも口にしないような卑猥な言葉が驚くほどスムーズに溢れ出す。

「ク、クリスさん……」

憧れのお嬢さまの乱れ姿を見せつけられ、雛子はブルブルと震えている。雛子にとって

クリスは完璧で非の打ち所のない令嬢だったのだ。よほどショックなのだろう、顔は血の気が引いて真っ青だ。

そんな雛子の視線も、クリスを羞恥地獄に追い込んでいく。

(見ないで……ちがいますの……これは演技なの……演技なのにい……)

意味のない自己欺瞞(じこぎまへ)を繰り返しながら、僅かな間にグンと色気を増した流し目が雛子以外の観衆をチラリと垣間見る。

今や昂奮のステージと化した電車内、大勢の男たちの食い入るような視線、女たちの嫉妬混じりの視線を自分一人が独占していることが、ゾクゾクと得体の知れない高揚感を掻き立てるのだった。

「ンはああンツ！ 見てえ……ああ……わたくしの……ああ……いやらしい姿を見てえ……んふつちゅ、むふ……くちゅんんつ！」

「オオオツ。たまらねえぜ、舌が絡みついて……チ○ポが溶けそうだつ！ くううおつ！ そろそろ出るぞお」

男のピッチが上がり、高速ピストンが脳を揺さぶる。肉棒と擦れ合う口腔粘膜が、燃えるように熱い。ズーンズーンと脳にまで衝撃を響かされるうち、自分はまだ男の精を受け取らただけの存在に墮ちたような気がしてきた。

(ああ……出されちゃう……アレを……精液をお口にい……っ！)

ライバルである可憐な美少女を責めていくうちに、令嬢の中に荒々しい昂奮がこみ上げ
てくる。それは初めて知るサディスティックなときめきで、もう精霊石の情報などそつち
のけで夢中になっていく。

『すごい迫力だな……』

ガーランドも驚くほどの変わりようだ。碧眼を情熱的に潤ませ、唇をペロリと舐める仕
草はとてもセクシーで、悪の帝国の女王様といった風格すら漂っていた。

「オナニーしているって認めなさいよ」

「あ、ああうっ！ ひっ、ひいんっ！」

食い込ませた布に研磨され、クリトリスの包皮がクルリと剥き上がる。鋭敏な粘膜を剥
き出しにされた女芯をこれでもかと擦り上げられて、快美の稲妻が股間を貫いた。絶え間
なく襲いかかる心地よい刺激に、思わず腰が動きそうになる。

「だ、だめえ……そこはもう……いじるなあ……」

スク水少女は汗まみれの身体をくねらせる。スーツはますます透けてしまい、幼さとア
ンバランスな色気を振りまいた。そんなサキをさらに追いつめる生理現象が……。

「ウフフ、濡れてきたわ。ここも透けちゃうわね」

「ひいっ！」

クリスの指摘通り、淫裂の谷間にはしたない蜜が滲み出しスーツのクロッチに染みを広

げていた。当然そこは視姦ターゲットの餌食となり、いくつも重なる十字から快感電流が流れ込んでくる。粘膜は甘い疼きに溶かされ、さらなる愛液を湧かせていく。このままでアソコも透けてしまい、はずかしい秘園が全校生徒に公開されてしまう。

（そ、それだけはだめえ！）

最も恐れていた事態に、サキは完全に冷静さを失い、

「し、して……るう……ああ……オ、オナニー……してるのおっ！」

ついに悲鳴混じりの告白をしながら、コクコクと頷いてしまう。

「毎日やってるの？」

「うう……週に……に、二回くらい……」

アーモンド型の紅腫に悔し涙を滲ませ、耳までまっ赤になりながらサキは答える。能力を奪われてしまった少女は、クールな仮面を剥がされ、内に秘めていた脆弱さをさらけ出されてしまっていく。

「サキちゃんがおナニーを……想像しただけでたままないぜ」

「週に二回も……なんてはしたないのかしら」

男子も女子もますますポルテージを上げながら、熱い視線と冷やかな視線を交互に送りつける。

「オホホホッ！ スケスケの水着で、みんなの前でそんなことまでカミングアウトしちゃ

うなんて、政治の透明性は大事だけど、ちよつとやりすぎじゃないかしら」

猫がネズミをいたぶるように捕らえた少女を弄んでいると、再び左手にカードの反応。
(普段は協力しないクセに、日だけは大サービスなんだから、エロ精霊は)

半ば呆れながらも、新しいカードの効果にドキドキ胸が高鳴る。ガーランドの説明を聞きながら新たなピンク色のカードをサキのカードデッキへと。

「ご褒美ほうびにもつと日な身体にしてあげるわ」

「や、やめて！ もう変なカード入れるなあつ！」

エロカードの恐ろしさを味わったサキは、血相を変えて嫌がるが拘束はビクともしない。
無情むじょうにも新たなエロカードがスロットにバシユツと押し込まれる。

「ああ、うあああああゝゝゝゝンツ！」

桃色の光が惱ましいスポットライトのようにサキの身体を包んだ。するとスーツの透明感はそのままに、色が扇情的なシヨツキングピンクへと変化していた。セクシーなレースで縁取りされたスーツはランジェリーのように。スポーティに少女の脚線を飾っていたニーツックスはガーターストッキングのように変化し、シューズの部分もハイヒールのように。さらに極薄の生地からは甘い香水のような匂いが漂い始める。

「ああ、こんな……」

大切なスーツを下品な淫具に変えられてサキは絶望の吐息を漏らす。赤い瞳にかつての

凜とした光は見えず、敗北の恥辱に潤んでいる。もう一息で屈服させられそうだ。

「今度のスーツは男の人の精液に感じるのよ。もちろん露出の快感もプラスされるから、きつとすごいことになっちゃうわよ。それに、みんなもう我慢できないみたいですよ」

「っ！」

オナドルへと眨められた少女はおののきながら周りを見た。男子生徒たちは皆、飢えたハイエナのように眼をギラギラさせている。しかもズボンの前は隆々と勃起し、中にはもうチャックを開けてしごき始める者もいた。

サキの姿に欲情しているのはもちろんだが、実はスーツから漂う芳香は牡を刺激する濃厚なフェロモンなのだ。若い牡たちは精力を増幅され、今にも暴発寸前だ。

「全校の男子生徒にぶっかけられたらどうなっちゃうのか、とっつても楽しみ」

「い、いや……いやっ」

サキは怯えきつてカチカチと歯が鳴るほど震える。勃起状態の男性器を見るのはもちろん生まれれて初めて。いくらイキがっていても、中身は清純な少女なのである。無数の情念の塊を突きつけられて、とても平静でいられない。だが暴君の如く振る舞っていた少女が見せる脆さは、少年たちの歪んだ性欲をくすぐってしまう。

「ハアハア……サキちゃんにぶっかけていいの？」

「うおおっ！ たまんねえ。ハアハア……どこにかけようかなあ」

サキの前に並んだ三人の少年が肉竿にくざおをシコシコ擦りながら標的を探す。二つの視姦ターゲットがピンクスーツの上を這い回り、そのうち一つがAカップの乳頭の上で止まった。

「決めた。俺はやっぱりちっちゃいオッパイだっ！ そりやつ！」

ドビュツ！ ドブドプウツ！

「ンあああああつ！ あ、熱いいつ！ あひいいんつ！」

白濁がしぶいて、狙い通りサキの薄い乳房にベチャツと粘りついた。汚されたと思うと同時に凄まじい快楽が乳房に突き刺さる。

「む、胸があ……あ、あ……うあああ……ンツ！」

あられもない声を白昼のグラウンドに響かせ、サキは薄い胸を反り返らせる。乳房の刺激だけで今にも氣をやつてしまおう。

「おおつ。すごい、ザーメン浴びただけで感じまくりじゃん」

「はあはあ……こんな……っ」

強烈な快美に圧倒され、サキはフルフルと頭を振った。新しいカードの威力は凄まじく、精液を浴びた胸だけでなく、ドロリと垂れ流れるお腹にもこの世のモノとは思えない愉悅が湧き起こり、サキは感電したように小さな身体を仰け反らせ続ける。

「次は俺だ。やつぱりツルツルのワレメちゃんにいくよつ！ うおおおおおつ！」

正面で自家発電していた少年が最後の一しごきをペニスに加える。

「あきやあああんんっ！」

銃弾で撃ち抜かれたように頭が跳ね上がり、ツインテールが跳ね躍る。フェロモンで強化されたのか、射精量は信じられないほど多く、目の前がまっ白になったと思つた瞬間、頭の中までまっ白になっていた。強烈な生臭さが鼻腔を突き抜けて脳底を焦がす。家畜の焼き印を押されてしまったような墮落感が、巖島令嬢としての矜持を粉々に打ち砕く。

「んああああ、うあううおああああ~~~~っ！ ひいつ、きたない、くさいっ！ こんなのいやなのに……く、くるう！ くるつてえ、イっちやううっつ!!」

ビクビクンッ！ 激しい痙攣で宙吊りの身体が踊り狂う。もう何がなんだかわからない。顔面射精という最も屈辱的な行為にすら、被虐のエクスタシーを極めてしまう。

「どうかしら、精霊石のありかを白状する気になつたかしら？」

ツインテールをつかんで上向かせると、童顔は恥辱と疲労感に歪みきつていた。

だが――

「ハアハア……こ、これくらい……なんともない……貴様にだけは負けない……っ」

ピジョンブラッドの輝きを放つ紅眼は、強い敵意を漲らせている。彼女を内側から支える強固な柱があるのだろう。それがなんなのかはわからないが……。

「いい根性ですわ。さあ、あなたたち、やつておしまい！ 肌という肌を隙間なく、欲情で埋め尽くしてあげなさい！」

「よし、俺もやるぞ、絶対領域からニーソに中出しだ」

「俺は髪だ。ツインテールに一発ずつぶっかけてやるぜ！」

無数のターゲットが少女の身体を埋め尽くし、白濁の弾丸が夕立のように降り注いだ。

「ひいっ！ や、やめてえ！ ああああん！ も、もうかけるなあ！ あひいん……
イ、イク……イクウツ！」

絶頂の波が引くよりも先に次のオルガの波が押し寄せて、サキは登り詰めたまま降りてこられなくなってしまった。

「こつちも出すぞっ！ ぶっかけてやるっ！」

ドビュドビュドビュッ！ ドクドクドクンッ！

「ひやうううっ！ だ、だめえっ！ 気持ち悪いのにい……あくううん……気持ちいいよ
お、あああん！」

太腿両側で二人が同時に爆ぜ、ニーソックスの中へ流し込まれた。スーツと肌の間を、灼熱の白濁がアメーバのように這い回り、ふくらはぎから爪先まで、か細い脚線を汚し尽くす。

「トドメだ。くらええっ、うりやあっ！」

なんと最後の一人は剛棒をスク水の水抜き孔に突っ込んできた。

「やめて、そんなところに、出さないでえ！ いや、いやあっ！」

「おお、サキちゃんのお腹、あつたかくてスベスベして最高だあ」

抗議など一切無視して、少年は思いきり射精する。

ブシューアアアアツ！ ビューウウウツツ！

ザーメン激流がスーツの中を遡る。お臍から鳩尾を通過し、ついには胸元からブシャアアアツと噴出した。間歇泉かんけつせんのような勢いで再び顔面にまでぶつかかった。

「ンああ、あああああ——ツ！」

溶けた熱蠟をスーツの間に流し込まれたような錯覚を感じながら、ツインテール少女は絶叫を迸らせる。全身を精液に包まれ汚されていくことがなぜか気持ちいい。

「イキなさい、サキ。無様にアへ顔晒しなさいよ。アハハハハ」

指先で肉の真珠を思いきり擦り上げながらクリスは嘲笑した。かつてない昂奮に理性は麻痺し、ケダモノじみたサデイズムに身体の奥がまつ赤な炎を立ち上らせる。

「ああつ！ イクツ、イクイクツ！ イクウウウ~~~~ツ!!」

ブツシャアアアアアアアツ！

擦られるクレヴァスに盛大な潮吹きさいこうほうの飛沫を飛ばし、ネコミミ少女はこれまでで最高峰の極みへと登り詰める。ビクンビクンと雷に打たれたように総身を痙攣させながら、断末魔の悲鳴を噴きこぼした。手足が腱を引きちぎらんばかりに突っ張り、振り乱すツインテールから汗の霧が飛散した。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 本体690円(税込)



全国書店で
好評
発売中

【小説】高井村正 / 挿絵：或十せねが

「セクシー退魔師が神様をご奉仕で鎮める伝奇アクション!」



全国書店で
好評
発売中

【小説】狩野景 / 挿絵：ぼち

「不死者を滅ぼす白刃が舞い踊る! ちょっぴりマッドな聖女様が学園を舞台に大暴れ!!」



【小説】羽沢向 / 挿絵：ピエール☆おじお

「魔法の天使ルルイエ・ルル! 地球の未来はルルにおまかせよっ☆」

全国書店で
好評
発売中

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 山梨学園戦姫ノブナガ! ①~③
- 思春期のなアダム ①~②
- 純情! 帝少女探偵団、赤い探路を撃て!

- 借金お嬢クリス ①~②
- プリンセスリバーシ!! 交響する美神と魔境
- BLANGEL 絶になつて踊る患者の夜

- 無敵の姫騎士が外・Mに目覚めたようです
- ピルグリムメイデン 深紅の巡礼聖女



あとみっく文庫

既刊情報

仙獄学艶戦姫ノブナガツ!

第一次水着大戦

超能力者の少年少女たちが集う特殊な学園——西開学園、北宮学園、聖ジョウント学園。それぞれが仙獄島の覇権を求め、ちょっとHな三つ巴バトルの幕が開ける!! 平和なはずのミスコン勝負は、暗殺騒動が起きたり水着美少女が縄で緊縛されたり触手生物が現れたりで、とんでもない方向に進んで——!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で
好評
発売中

仙獄学艶戦姫ノブナガツ! 弐

北宮学園生徒会長選挙戦

絶対的な権力を誇る北宮学園の生徒会長の座を競い、義元、氏康、晴信ら北宮三大美女はもちろんのこと、長尾く美姫)景虎、宇佐美く奈々)定満といった新ヒロインも加わり、エッチにバトルを繰り広げる!! 敗北したヒロインは勝者の奴隷に!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で
好評
発売中

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトで <http://ktcom.jp/>



仙獄学艶戦姫ノブナガツ!

信玄、出陣!

北宮学園の生徒会長選挙戦も大詰め。肉欲に堕ちた義元と氏康を従えた景虎は、更なる戦力の拡大を図る。そんな中、信玄は元凶である按針を倒そうと信長に協力を求め、聖ジョウントのエリザは封印された化け物を発見する。様々な思惑が交錯する物語は佳境を迎え、信長は姦落の危機に陥るのだが!?

小説●**斐芝嘉和**
挿絵●**SAIPACo.**



全国書店で
**好評
発売中**

BLANGEL

輪になりて踊る患者の夜

月下の街を紅に染め上げる、鮮血のサスペンスアクションの幕が上がる! 吸血姫アリシアは異形の生物「被験体」の影を追って戦い続けるが、予想もしない反撃に遭って虜囚の辱めに晒されてしまう!! 『隔月刊コミックヴァルキリー』の長期連載人気漫画が待望の小説化!

小説●**夜士郎**
原作・挿絵●**渡瀬行人**



全国書店で
**好評
発売中**



思春期なアダム

謎の少年ルシアの手で“蛇眼”の力に覚醒した藤田陸月。世界の半分を支配する秘密を秘めた彼をめぐり、天使と悪魔そして人間による争奪戦が始まった！ ごく普通な少年の日常は一変し、美少女天使のエンジュや憧れの同級生伊部草マキナまで巻き込み、激しくそしてエッチに胎動する！

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃



全国書店で
**好評
発売中**

思春期なアダム 2

背後をならう者

「世界の半分を支配する力」を秘めた“蛇眼”の持ち主として、天使たちに保護されたごく普通の少年、陸月。それでも普段通りの学園生活を送る彼の前に、新たな刺客が現れる…。天使・悪魔・人間の三つどもえのバトルはより過熱！ “蛇眼”をめぐり迫り来る美女に美少女&美少年(!?)たちの誘惑で、陸月も新たな局面に…?

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃



全国書店で
**好評
発売中**



借金お嬢クリス

42兆円耳を揃えて返してやりますわ

異世界の住人・ジグレットの奸計で父を失い、突如無一文となった令嬢クリス。なんとその借金額は42兆円! クリスは借金取り立てに現れた武装精霊ガーランドの力を借り、ジグレットへ借金返済の戦いを挑むことに! 果たして、傲岸不遜な令嬢はセレブな日常を取り戻し、己の貞操を守ることができるのか!?

小説●筑摩十幸

挿絵●了藤誠仁

全国書店で
好評
発売中

借金お嬢クリス2

42兆円踏み倒してやりますわ

セレブから無一文に転落したクリスは、借金を返すために今日もバイト&バトル! 水着コンテストで痴態を晒し、工事現場で肉体労働&ガーランドからの肉体調教と、八面六臂の活躍(?)に加え、ライバルのロリ令嬢、サキも加わり、エッチ&借金バトルはより熱く燃え上がる!

小説●筑摩十幸

挿絵●了藤誠仁

全国書店で
好評
発売中

クリス 悪魔堕ち!?

「愛するジグレット様のため、死んでもらいますわっ!!」
妖魔ジグレットに囚われ、パートナーのガーランドを奪われたうえ、奴隷に堕ちたクリスとサキ。妖艶な鎧をまとわれた令嬢たちが、今度は雛子へと襲いかかる!! 高飛車令嬢クリスの受難とエッチを描く学園アクション、いよいよクライマックスに突入!

令嬢はいかにして
42兆円を返済したか?

借金お嬢 クリス

小説●筑摩十季
挿絵●了藤誠仁

3

2010年6月下旬発売!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!